【逆向き設計】題材構想図（全３時間）

第２学年　『旋律が追いかけるように重なり合っていくおもしろさを味わおう』

題材の学習課題　パイプオルガンの豊かな響きを感じ取り、バロック時代を代表するフーガ形式の音楽の魅力をまとめよう。

本題材で育成すべき資質・能力

知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性等
パイプオルガンの音色とフーガ形式の音楽から，楽曲がもつ曲想と音楽の構造との関わりを理解する力。	フーガ形式の複雑な音楽の中から，バッハの作曲技法を発見し，自身の言葉で根拠をもって楽曲のよさを評価するなど，音楽的価値を見出す力。	主体的に鑑賞の学習に取り組み，バロック時代の音楽に親しんでいく態度を養うと共に，様々な多声音楽の良さを尊重していく豊かな情操。

【題材のねらい】　パイプオルガンの豊かな響きを感じ取り，バロック時代を代表するフーガ形式の音楽の魅力をまとめよう。

【目標】

・多声音楽によって生み出されるバロック時代特有の音楽に関心を持ち，音楽に対する感性を豊かにする。

・パイプオルガンの音色とフーガ形式の音楽から，曲想と音楽の構造との関わりを理解する。

・曲や演奏に対する評価とその根拠について考え，音楽のよさや美しさを味わって聴く。

題材のまとめ

これまでの学習を踏まえて，フーガの魅力について自分の言葉でまとめよう。

バロック時代を代表する音楽の１つである『フーガト短調』は，バッハによって作曲されパイプオルガンで演奏されている。演奏者は，手鍵盤だけでなく足鍵盤も使いながら，４つの声部を１人で演奏することを知った。知

楽曲を第一部から第３部の３つに分けて詳しく鑑賞してみると，主題の現れ方がソプラノから順番になっていることや，長調に変化していること，そして最後は低音のバスパートが力強く主題を演奏していることを感じ取ることができた。複雑な音楽の中にも教会音楽ならではの，バッハの美しい作曲技法を発見することができた。思

楽器１つでオーケストラの様な迫力が響き渡るパイプオルガンの音色を，コンサートホールで聴いてみたいと思った。そして，音楽を鑑賞する時は，形式に注目して聴くことを大切にし，様々な多声音楽の美しさを味わって鑑賞していきたい。学

第３時　フーガ技法を使った音楽の魅力

様々な演奏形態によるフーガ形式の音楽を鑑賞し，フーガの魅力について根拠を持って自分の言葉でまとめることができる。　思　学

第２時　フーガ形式

主題が次々と追いかけるようにして重なり合いながら展開していくフーガ形式から，バッハの作曲技法を発見できる。　思

第１時　バロック時代の音楽様式

パイプオルガンの豊かな音色を感じ取り，バロック時代の音楽様式や作曲家について理解することができる。　知

【題材の入り口】生徒の姿

バロック時代(1600 年代～1750 年)の音楽は，１年生で，ヴィヴァルディ作曲の『春』の題材で学習している。当時の鍵盤楽器“チェンバロ”については知っているが，同じ時代に発明された“パイプオルガン”の音色を聴いたことがある生徒は少数である。また，これまで学習した音楽の形式は，『リトルネッロ形式』や『２部形式』，『ソナタ形式』についてであり，『フーガ形式』の音楽を初めて聴く生徒が多数いる。また，音楽を鑑賞し，曲想と音楽の要素を関連付けて自分の考えを述べることが難しい生徒が半数いる。（事前アンケートより）